

2023 年度春季 大阪大学言語文化学会 第 62 回大会

2023 年 6 月 29 日（木） 於 大阪大学 豊中キャンパス

発表要旨

留学経験者に関するからかいのディスコース分析
－メディアで表象されるイデオロギーに注目して
稲葉 阜

現代の日本社会において、留学経験者にはグローバル人材としてこれからの日本を担う役割が期待されている。しかし、YouTube 等で見られる留学経験者を扱った動画に目を遣ると、彼ら／彼女らが嘲笑やからかいの対象として描かれていることが目を引く。このような動画では、留学経験者の言動や行動が、彼ら／彼女らのステレオタイプやイデオロギーとして表象されている。

留学経験者に関するステレオタイプやイデオロギーの形成において、メディアは重要な役割を果たすと考えられる。Bucholtz (2010) や Sierra (2019) によると、メディアがある特定の人物像や人種のステレオタイプやイデオロギーを生産し、それを人々が目にする・実践することでそれらが強化され、再生産される。現状では、留学経験者は日本社会に肯定的な影響を与え得る存在として捉えられている。一方で、動画の中では留学経験のある日本人の描かれ方が笑いの対象とされている。このような留学経験者の表象や、留学経験者にまつわる偏見はメディアを通して再生産されていくと予想される。

本研究では、YouTube、Instagram、TikTok に投稿された留学経験者について描いた動画を取り上げ、分析する。そして、留学経験者のどのような行動が嘲笑の対象になっているのか、そこにはどのようなイデオロギーが表象されているのか、そしてそのイデオロギーはどのように再生産・再構築されているのかを明らかにし、留学経験者にまつわるディスコースとはどのようなものか考察する。

ナラティブにおけるアイデンティティの揺れ
－COVID-19 下での地域的差別のケーススタディ
張 応謙

新型コロナウイルス感染症のパンデミック下において、人々の地域間移動が感染拡大に繋がるため、感染拡大防止の対策として外出制限の要請が行われてきた。外出制限の政策は感染拡大を抑制する効果が認められたものの、日本で行われる法的効力のない外出制限は「自粛警察」の発生を促し、地域的差別の助長になるとも懸念されている。本研究は、そのような地域的差別が新型コロナウイルス感染症の体験談における再生産のプロセスに目を向ける。また、これまで新型コロナウイルス感染症のパンデミックが人種差別や社会的マイノリティに対する差別を悪化させることが多くの研究によって確認されてきたが、管見の限りされる側に焦点を当たった研究がほとんどであり、

する側に注目する研究がまだ少ない。本研究は地域的差別をする側の語りを分析することを通して新たな視点の提供を試みる。

本稿は、新型コロナウイルス感染症に関する体験談における地域的差別の表象、及びそれに伴う語り手のアイデンティティの構築とその揺れの様相を明らかにする。分析対象として、2021年8月に実施した、新型コロナウイルスに関する体験をテーマとする日本国内居住の研究協力者との1対1インタビューの録画録音を文字化したデータを扱う。

分析の結果、本稿のデータにおいて人の地域間移動によって高い感染リスクを晒されるゆえ地域的差別を実行する加害者、または自ら地域間移動の際に地域的差別を受ける被害者という正反対のアイデンティティの構築が行われ、その構築に応じて地域的差別に対する語り手の立場の揺れも観察された。従って、相互行為の文脈に応じて参加者は語りを手段に随時アイデンティティを調整しながら構築していること、またコロナ禍の時代に形成される新しい道德規範を持って他人の行為を評価し、差別の加害者になりかねないことを指摘したい。

中国語の「我」と「你」

－話し手・聞き手以外の対象を指す用法－

杜 天昊

「我」/wǒ/と「你」/nǐ/には第一人称（話し手自身）と第二人称（話の聞き手）を指すほか、第三者を指示する用法が存在する。本論ではこのような通常と異なる人称代名詞「我」と「你」の使い方を『第三者を指す「我」と「你」』と呼ぶ。『第三者を指す「我」と「你」』は、よく試合の解説、授業、物語などの場面で見られ、主に話し言葉に現れる用法である。

人称代名詞が本来の人称と異なる指示対象を指す現象は多くの研究に指摘されてきたが、『第三者を指す「我」と「你」』という具体的な用法はほとんど議論されていない。陳(2009)、張(2005)は、人称の指示対象の変換が生じる原因は、話し手と聞き手の社会的関係にあると主張したが、第三者を指す「我」と「你」はほとんど社会関係の影響を受けず、一般的な人称の指示対象の変換規則では解釈しにくい。

例文を考察したところ、第三者を指す「我」と「你」は連体修飾節など、一定の統語構造・文脈条件に依存していることがわかった。その上、「我」と「你」指示対象の選択は恣意的ではなく、先行文脈に存在する人物や、複数の人物が登場する順番に関わっている。

本稿は発話者の視点に着目し、「我」と「你」が第三者を指示する動機の分析を行う。野田(1995)の「文脈依存の視点」の理論を援用し、第三者を指す「我」の分布と、その存在に必要な文脈条件を探り、久野(1978)の「共感度」と「談話主題の視点ハイアラーキー」を援用し、第三者を指す「我」と「你」が指示対象を選択する原則についてモデルを示す。

認知言語学の視点からみる日本語と中国語の「心」の概念化

－「心」を「もの」に喩える慣用表現の意味拡張の比較を通じて－

劉 婉儀

「心（こころ）を打つ/動人心（XIN）魄」のように、日本語と中国語において、「心」を含む慣用表現が日常で多く用いられており、人の知的・感情的活動を表している。日本語でも中国語でも、「心」を主に精神的な概念として捉えている。私たちは「心」の慣用表現を使う時、その意味を字義通りに捉えるのではなく、慣用的意味を捉えている。例えば、「心がくじける」は、『広辞苑』によると、文字通りの意味ではなく、「何かをきっかけに勇気や気力が弱まり衰える」という

慣用的意味を表す。このように、「心がくじける」の文字通りの意味から慣用的意味へ拡張することができるのは、〈心は傷つきやすいもの〉メタファーが動機づけているからであると考えられる。

Lakoff & Johnson (1980) によると、メタファーは言語の問題だけでなく、物事の考え方の問題でもあり、メタファーとメトニミーが私たちの概念体系の成立に関わっているものである。本発表はこの認知言語学の観点に立ち、日本語と中国語の「心」を含む慣用表現の意味拡張を切り口として、「心」を「もの」に喩える場合、日本語と中国語の「心」がそれぞれどのように捉えられているか、どのように概念化されているかという課題を設定した。そして、『日本国語大辞典』などの辞書、BCCWJ や中日対訳コーパスから例文を抽出して分析を行い、「心」を「もの」に喩える場合、日本語と中国語の「心」の概念化の共通点と相違点を考察した。

結論としては以下のことがあげられる。日本語でも中国語でも「心」を「動くもの」や「鏡」に捉えているという共通点が観察されるが、「心腸熱/心眼多」のように、日本語より、中国語の「心」は他の身体部位詞（腸や眼）と合わせて表現する例が多く見られるので、「身体」と別個のものではなく、一体化したものと捉えられるという相違点も観察される。

日本語複合動詞における V2 の補助動詞化と結合制約

－ 「V+きる」を中心に－

張 栩

本稿は、複合動詞において、「完了・完遂」というアスペクト的意味を表す代表的な補助動詞「～きる」の前項動詞 (V1) として生起できる動詞とできない動詞はどのような意味特徴があるかを考察した上で、このような意味制約の要因を本動詞「切る」の意味拡張プロセスと関連づけて解釈する。

日本語の複合動詞の中で、後項動詞 (V2) は文字通りの意味が希薄になり、格関係 (項構造) もほとんど失われ、形式的な意味を V1 に添える働きをすることが見られる。その中、「V+きる」は生産性の高い一例だといえるが、結合できない V1 も多い。例えば、「走りきる」「食べきる」「書ききる」などが容認される一方、「* (赤ちゃんが) 泣ききる」「* 一曲を聞ききる」「* (鏡を) 見きる」「* (使い方を) 知りきる」などは特別なコンテキストがなければ容認されない。語彙的複合動詞における結合制約については影山(1993)で提案され広く認められてきた「他動性調和の原則」はあるが、「V+きる」のような統語的複合動詞の結合制約に関する一般化がまだない。日高 (2016) では、「～きる」が状態動詞と漸次的対象を取らない活動動詞とは複合できないと主張している。しかし、「彼女のことを知る/*知りきる」から分かるように、漸次的対象をとる動詞でも「～きる」と結合できないことがある。本発表では、「V+きる」において「*泣ききる」「*知りきる」などが容認されないという事実に注目し、対象の漸次性によって規定される制約とは別に存在すると考えられる意味的制約を明らかにしたい。この意味制約は「切る」の切断を表す基本義から由来するものであり、「切る」の語彙意味情報としてその語彙概念構造や特質構造によって説明されるものだと考えている。

以上のように今回の発表では、「V+きる」の結合制約を明確にし、その要因や意味記述の適切な仕方を探っていききたい。

DE(的) as an Atelic Marker of Mandarin Chinese

KYUU Gyouseki

官話中国語の真分裂文に関する分析モデルは 50 年代から次々と提案されているが、以下の一般化は公認されている：

真分裂文は「...是①...②的③...」の骨組みにより成立し、①にある句は「是」から対比焦点が付与され、文の残った部分は②にあり、「的」により真分裂文の前提部分となる。特別的に、元々前提部分の一部である目的語は「的」に先行され、③の位置にある例(いわゆる VdeO 分裂文)も母語話者に容認される。そしてこの配置の真分裂文は vP より高い要素が許されない、将来に関する表現が排斥されるなど、この配置にだけ観察できる制限を受けている。以上の性質は明らかに「的」がもたらすものであるが、「的」は先行研究で独立なものでなく、分裂文骨組みの一部として分析される傾向が見られる。

本発表は以下の主張に関する証拠を提示した：

1. VdeO 分裂文の「的」は無界相(atelic)標識である。この「的」は真分裂文の骨組と無関係に無界の単文にも出現し、単文と真分裂文の唯一の違いは対比焦点の有無である。

2. 無界相(atelic)標識「的」は Wang 2019 で提案された有界相標識「了」と相補分布となり、長距離移動を通じて vP 以上の外部相標識を許可する。これは vP より高い要素が許されない、将来に関する表現が排斥される原因である。

無界相標識としての「的」及び関係節などで見られる連体修飾を表す「的」との関係に関して、本研究は以下の手がかりを発見した：

1. ほぼ全ての VdeO 真分裂文には潜在的な関係節読みがあるが、vP より高い要素、あるいは述語部分を有界にする要素の介入は関係節を唯一の読みにすることができる。

2. これと反対に、罵る言葉「他妈的(the fuck)」の介入は非関係節を唯一の読みにすることができる。

これらの手がかりから、単文、分裂文と関係節の統一生成モデルを構築する可能性が覗かれる。

アーヴィン・ウェルシュの『フィルス』における絶食と過食

石倉 綾乃

アーヴィン・ウェルシュの長編第3作である『フィルス』は、前作までのエディンバラのジャンキーや無職の若者たちの社会ではなく、警察という権力を舞台とした点で転機となる作品だが、依存症やトラウマ、スコットランド社会のミソジニーやホモフォビア、レイシズムといったテーマを扱う点、および汚物的な感性とレトリックを動員する点では、一貫している。本作では、腐敗した刑事であるブルースが自ら犯した殺人の捜査にあたるが、彼の腸内に生息する線虫が彼の抑圧された記憶と罪悪感を語るという仕掛けが用いられている。物質的な汚さはもちろん、読者を不快にせずにおかない悪人を描くことに長けたウェルシュだが、その汚さは常にイングランドに対するスコットランドの位置づけを反映しており、腸の形をした吹き出しがナレーションを覆っていくような形式的実験は、ウェルシュの作家としての出自と関わっている。作家の個人的なフェティッシュにも思える汚物への関心だが、それは常に政治的な効力をはらんでいる。同時に、汚物に伴い当然問題になるのは食べることだ。抗議における絶食がツツねに男性とともに描かれる一方、女性と摂食にまつわる言説は性的抑圧とミソジニストなステレオタイプに結びつく。そのことを指摘した上で、摂食というリファレンスによって、ストーリー上では抑圧され歪められる女性の声が、いかなる回路に開かれうるかを、同時代の事象への言及、特にダイアナ妃の葬儀とを通じて考察する。